

## トビウオ通信 (R5 第3号)

<https://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> (TEL 0855-22-1720)

### 《2023年度第1回日本海スルメイカ漁況予報》

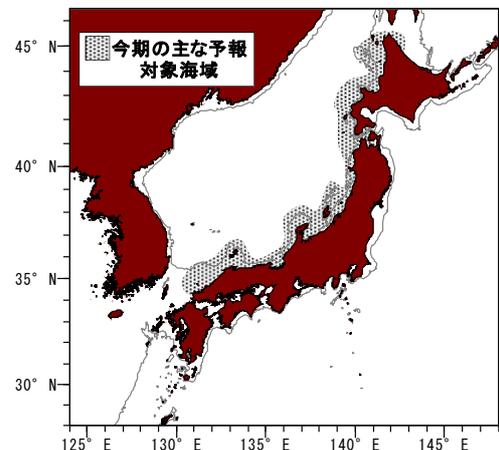
2023年5月12日に国立研究開発法人 水産研究・教育機構（水産資源研究所）から「2023年度第1回日本海スルメイカ長期漁況予報<sup>※1</sup>」が発表されました。今回はその概要と島根県沖でのスルメイカ漁況を紹介します。

#### 今後の見通し（2023年5月～7月）のポイント

対象魚種：スルメイカ  
対象海域：日本海沿岸域  
対象漁業：主にいか釣り漁業  
対象魚群：主に秋季発生系群

- (1) 来遊量：前年および近年平均を下回る
- (2) 漁期・漁場：主な漁場は本州北部日本海で  
漁期は近年同様

\* 「近年」とは直近5年間(2018年～2022年)を示す。



#### (1) 来遊量

2022年10月～11月に水産研究・教育機構（水産資源研究所）等が実施したスルメイカ稚仔調査では、スルメイカ幼生（主に外套背長<sup>がいとうはいちょう</sup> 1 mm～3 mm）の分布量は、2021年を下回り、2017～2021年の平均を下回る状況でした。また、2023年4月に実施したスルメイカ新規加入量調査では、今期に漁獲が期待されるサイズ（外套背長<sup>がいとうはいちょう</sup> 5 cm以上）のスルメイカの分布量は、2022年および2018年～2022年平均を下回る状況でした。以上のことから、今期（5月～7月）の来遊量は、「**前年および近年平均を下回る**」と予測されています。

## (2) 漁期・漁場

スルメイカの漁場形成に影響を与える4月中旬から6月にかけての対馬暖流域における表面水温および50 m深水温は、平年値よりも「かなり高め」（「平年値」とは過去30年（1986年～2015年）の平均値を示す）と予測されています（2023年度第1回日本海海況予報<sup>※2</sup>、国立研究開発法人水産研究・教育機構、2023年4月7日公表）。2019年以降の日本海沿岸では同様の傾向が続いており、主な漁場は「**本州北部日本海**」、漁期は「**近年同様**」と予測されています。

※1, ※2の詳細は、以下の水産研究・教育機構のホームページからご覧いただけます。

※1：[https://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr2023/20230512\\_surume/20230512press\\_srm.pdf](https://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr2023/20230512_surume/20230512press_srm.pdf)

※2：[https://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr2023/20230407\\_jpn/20230407jpn\\_press.pdf](https://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr2023/20230407_jpn/20230407jpn_press.pdf)

## 島根県沖でのスルメイカ漁況

主要3港（浜田、西郷、恵曇）<sup>※3</sup>における小型いか釣り漁業（5トン以上30トン未満）によるスルメイカの月別の水揚動向を図1に示しました。2023年の1月～3月までの水揚量は49トンで、前年同時期の水揚量40トンを上回りました（前年比122%）が、近年同時期の水揚量63トンを下回る（平均比77%）漁況で経過しています。

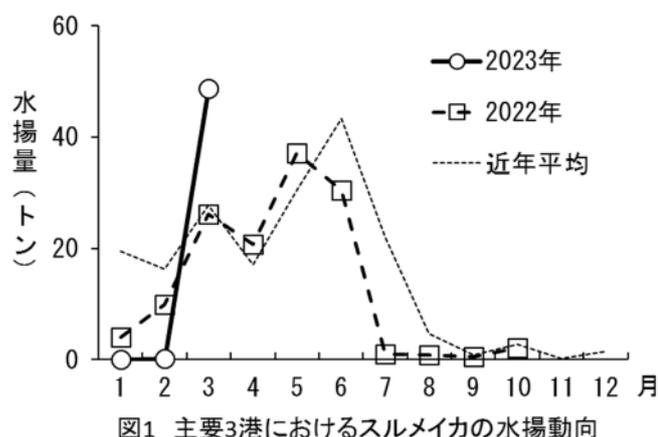


図1 主要3港におけるスルメイカの水揚動向

これは、2019年以降の海水温などの海洋環境の変化により、スルメイカの産卵に適した海域が縮小する傾向が見受けられ、新規の加入量が少なくなったことが主な要因であると考えられます。そのため、スルメイカ全体の資源量が減少し、島根県沖への来遊量も減少した可能性があります。ただし、スルメイカは1年魚であるため、スルメイカに適した環境条件が揃えば資源量が回復する可能性もあり、今後の動向を注視していく必要があります。

※3：浜田は属地データ、西郷および恵曇は属人データを集計。